

## 第二章 浮舟の物語 浮舟、小君との面会を拒み、返事も書かない

[第一段 薫、浮舟のもとに小君を遣わす]

横川に通ふ人のみなむ(横川の修行に通う人だけが)、このわたりには近きたより\*なりける(この尼庵に親しく出入りしていたようなので)、かの殿は(大将殿は)、「この子をやがてやらむ(この童子をこのまま尼庵に遣わそう)」と思しけれど(とお思いだったが)、人目多くて便なければ(人目が多くて手筈段取りが付けられず)、殿に帰りたまひて(この日は三条宮邸にお帰りになって)、またの日(その翌日に)、ことさらにぞ出だし立てたまふ(段取りを着けて童子を遣いに立てて小野に向かわせなさいます)。 \*「なりける」は「なりけり(～なのであった)」の連体形で強調の係助詞「なむ」を受けている文型なので、是を文末と見做すことは妥当な語用であるかに見えるらしい。が、連体形で結ぶ言い方は下に<ものなり>という説明句が定形省略されているので、其処で論旨が終わる場合には結びになるだろうが、文脈や構文によっては、更にその説明を受けて文を続けるという物の言い方はあるのだろう。即ち、順接条件の<ものにて>や逆接条件の<ものなれど>や恒常条件の<ものなれば>という文意は、是が省語されるので分かり難いが、論理立てとしては持ち得るのであって、此処でも順接で以下に続く構文と読んで置く。

睦ましく思す人の(大将は、近しく仕えさせている従者で)、ことことしからぬ二、三人、送りにて(目立たぬように、身分の高過ぎない者の二、三人を童子に付き添わせて)、昔も常に遣はしし隨身添へたまへり(以前から常陸女への遣いをずっと勤めてきた隨身を相談役にお加えなさったのでした)。人聞かぬ間に呼び寄せたまひて(大将は誰も居ない部屋に童子を呼び寄せなさい)、

「\*あこが亡せにし姉の顔は(其方の亡くなった姉の顔は)、おぼゆや(覚えているか)。今は世に亡き人と思ひ果てにしを(今はこの世に居ない人と諦めていたが)、いと確かにこそ(間違い無く)、ものしたまふなれ(生きていらっしゃるのだ)。疎き人には聞かせじと思ふを(縁者以外には知らせたくないの)、行きて尋ねよ(其方が行って確かめよ)。母に、いまだしきに言ふな(母にも、まだ言うな)。なかなか驚き騒がむほどに(変に驚き騒ぐ内に)、知るまじき人も知りなむ(余計な者まで知ってしまう)。その親の御思ひのいとほしさにこそ(その親心の悲しみを助けるために)、かくも尋ぬれ(こうして其方をして確かめるのだから)」 \*「あこ」は「吾子(我が子)」で、年少の者への親称とのこと。

と、まだきにいと口固めたまふを(と今の内から嚴重に口封じなさるのを)、幼き心地にも(童子は子供心にも)、姉弟は多かれど(はらからはおほかれど、他に姉妹は多いが)、\*この君の容貌をば、似るものなしと思ひしみたりしに(姉君の美しさに似る者は居ないと思

い込んでいたので)、亡せたまひにけりと聞きて、いと悲しと思ひわたるに(亡くなったと聞いて、とても悲しんでいた所に)、かくのたまへば(大将がこう仰るので)、うれしきにも涙の落つるを、恥づかしと思ひて(嬉しくて涙が落ちるのを、恥づかしく思って)、 \*「このきみ」は<姉君=常陸女>らしい。とても紛らわしく分かり難い。なぜ<姉君>と言わないのか。

「\*を(ハイ)、を(ハイ)」 \*「を」は注に<『集成』は「唯唯」の字を当てる。目上に対して応諾の旨を応える言葉。『完訳』は「かしこまった態度での返事」と注す。>とある。古語辞典には<応答の声。はい。>とある。格助詞からの応用なら、対象<を理解した=承知した=承った>みたいな語用かもしれない。

と\*荒らかに聞こえたり(と、辛うじてまばらに応えていました)。 \*「あららか」は「荒らか」なのだろうか。少なくとも、大将に対して<粗略な>返事は有り得ない。この「あららか」は「粗らか」で、嗚咽を抑えながら、童子はやっと<まばらに>答えた、のではないかと思う。

かしこには(小野尼庵には)、まだつとめて(まだ翌朝の内に)、僧都の御もとより(そうづのおおんもとより、僧都から)、

「昨夜(よべ)、大将殿の御使にて(だいしゃうどののおおんつかひにて)、小君や参うでたまへりし(こぎみやまうでたまへりし、童子が参上なさったでしょうか)。\*ことの心承りしに(大将殿から尼姫が流浪なさった事情をお聞きしまして)、\*あぢきなく(知らぬ事とは言え、不調法があったかと)、かへりて臆しはべりてなむ(かえって恐縮しています)、と\*姫君に聞こえたまへ(と姫君に申し上げます)。みづから聞こえさすべきことも多かれど(私から直接姫にお話し申すべき事も多いのですが)、今日明日過ぐしてさぶらふべし(今日明日は修行があるので、その後で伺います)」 \*「ことのころ」は<尼姫の失踪事情>のようだが、薫殿は僧都に詳しい事情は話していない。しかし、この女が<源氏薫右大将の女であった>ことこそが最重要事項である。仔細など、どうせ僧都には無関係だ。ただ、薫大将が相手だから、僧都はビビった、少なくとも焦った。いや、僧都の肚は据わっているのだろう。そも山暮らしなのだから、いざとなれば、身を引く覚悟は何時でもありそう。理もある。また、僧都自身も中宮と直接話せるほどの地位の高さだ。が、大将は計り知れない権勢家だ。事を構えて良いことはない。良好な関係が望ましい。どうしても円満に事を納めたい。それが心理圧力には、やはり成るのだろう。 \*「あぢきなし」は<不調和。不相応。不調法。>あたりか。しかし、出家させたのが失敗だった、とは言えないはずだ。僧侶は出家を勧める立場なのだから、これはあくまでも<事情を十分には知らずにいたので、失礼があったかもしれない>くらいの言い方でないと信用を損なう。が、この「あぢきなし」の言い方で、そういう言い方になっているのかどうか、私にはよく分からない。 \*「ひめぎみ」と僧都が女を呼ぶのは以前にあっただろうか。とにかく珍しい。

と書きたまへり(とお書きになった手紙が届きました)。「これは何ごとぞ(これはどういうことなのか)」と尼君驚きて(と尼君は驚いて)、こなたへもて渡りて見せたてまつりたまへば(尼姫の部屋にその手紙を持ってきてお見せ申しなさると)、面うち赤みて(おもてうちあかみて、姫は顔を赤らめて)、「ものの聞こえのあるにや(私のことが外聞に漏れたのだろうか)」と苦しう(と辛く)、「もの隠ししける(事情を隠し立てしていた)」と恨みられむを

思ひ続けるに(と尼君に恨まれる事を思えば)、いらへむ方なくてゐたまへるに(応えようもなく座していらっしゃると)、

「なほ、のたまはせよ(ぜひ、お話し下さい)。心憂く思し隔つること(情けなくも隠し立てなさって)」

と、いみじく恨みて(と尼君は非常に姫を恨んで)、ことの心を知らねば(事情が分からないので)、あわたたしきまで思ひたるほどに(苛立っていらっしゃると)、

「\*山より、僧都の御消息にて(山から僧都の御文遣いとして)、参りたる人なむある(参った者でございます)」 \*「やまより～」は注に<以下「人なむある」まで、小君に同行した従者の、案内を乞う口上。>とある。

と\*言ひ入れたり(と童子一行の従者が尼庵に申し入れました)。 \*「いひいれたり」は注に<と言って差し入れた、の意。訪問者の詞であることがわかる。>とある。話の展開を予感させる来訪者の登場場面らしい。

#### [第二段 小君、小野山荘の浮舟を訪問]

\*あやしけれど(僧都から立て続けの手紙とは、変だったが)、「これこそは、さは、確かなる御消息ならぬ(これが、それでは、訳の分かる手紙なのだろう)」とて(と尼君は思って)、 \*「あやしけれど」は注に<『完訳』は「少し前に僧都からの消息が届いたばかりなのにと、不審な気持」と注す。>とある。従って、補語する。

「こなたに(此方にお入り下さい)」

と言はせれば(と女房に言わせると)、いときよげにしなやかなる童の(とても端然とした細身の童子の)、えならず装束きたるぞ(優美な服を着た者が)、歩み来たる(廂前に歩いて来ました)。\*円座さし出でたれば(廂間部屋から簀子に円座を差し出すと)、簾のもとについゐて(童子は簾の前に膝を着いて腰を落とし)、 \*「円座」は「わらふだ」と読みがある。「わらふだ」は古語辞典に「藁蓋」と漢字表記があり<ゑんざ(円座)に同じ。>とある。で、「円座」は大辞泉に<藁(わら)・菅(すげ)・藁(い)などで、渦巻き形に、まるく編んだ敷物。わろうだ。わらざ。>とある。

「\*かやうにては(こうしたお取次では)、さぶらふまじくこそは(お使いが勤まらない、折り入った用件と)、僧都は、のたまひしか(僧都は仰いましたが)」 \*「かやうにては」は注に<以下「のたまひしか」まで、小君の詞。『集成』は「簀子の座というよそよそしい扱いに不満を述べる趣」と注す。>とある。ただ、下に「尼君ぞいらへなどしたまふ」とあるので、御簾外を嫌うというよりは、内密な用件なので人を介した取次でなしに、直接の受取を要求した、というように読んで置く。「さぶらふまじ」は<お役目が果たせない>ということだろう。

と言へば(と言うので)、尼君ぞ(尼君ご自身が)、いらへなどしたまふ(受取のお返事をなさいます)。文取り入れて見れば(尼姫が手紙を部屋に取り入れて見ると)、

「\*入道の姫君の御方に(にふだうのひめぎみのおおんかたに)、山より(やまより)」 \* 「入道の姫君」という宛名は恐らく初めて使ったのだろう。相当に堅苦しい呼称に聞こえる。尤も、僧都が尼姫に手紙を出すこと自体が初めてだったのかもしれないが。

とて(と表書きがあつて)、\*名書きたまへり(裏には僧都の法名を正式に書いていらっしやいました)。あらかじなど(姫は自分宛ではないなどと)、あらがふべきやうもなし(拒みようもありません)。 \* 「なかきたまへり」は注に<僧都の法名が書かれている。>とある。正式な書式らしい。

いとほしたなくおぼえて(とうとう突き止められて、素性も知れたかと思えば、姫はひどくきまり悪く思えて)、いよいよ引き入られて(いよいよ引き込んで)、人に顔も見合はせず(誰にも会いません)。

「常にほこりかならずものしたまふ人柄なれど(いつも晴れやかではなくいらっしやる姫君だが)、いとうたて(籠もりつきりとは)、心憂し(心配だ)」

\*など言ひて(と言って尼君は)、僧都の御文見れば(僧都の御手紙を見ると)、 \* 「などいひて」は敬語が無いので、主語は尼君らしい。

「今朝、ここに大将殿のものしたまひて(今朝此方に大将殿がいらっしやいまして)、御ありさま尋ね問ひたまふに(あなたの御様子をお尋ねになりましたので)、初めよりありしやう詳しく聞こえはべりぬ(初めからの有様を詳しくお話し致しました)。御心ざし深かりける御仲を背きたまひて(御愛情の深かったお二人の仲に背きなさって)、あやしき山賤の中に出家したまへること(卑しい山村の中に出家なさったのは)、かへりては(仏道への導きならず、却って)、仏の責め添ふべきことなるをなむ(未練を残すという仏心に背く責めを負うことになる旨を)、承り驚きはべる(聞き知って驚いております)。

いかがはせむ(私の力ではどうにも出来ません)。もとの御契り過ちたまはで(元の大将殿との御縁を損ないなさらずに)、\*愛執の罪をはるかきこえたまひて(殿の執着を晴らし申しなさって)、\*一日の出家の功德は(出家生活を一日でも送れば)、\*はかりなきものなれば(大きな善行となりますので)、\*なほ頼ませたまへとなむ(還俗後もなお、仏をお頼りなさいませとのように、願い申します)。ことごとには(詳しいことは)、みづからさぶらひて申しはべらむ(拙僧自ら参じてお話し申します)。かつがつ(先ずは)、この\*小君聞こえたまひてむ(この弟君がこの手紙をお届け申しなさるでしょう)」 \* 「愛執の罪(あいしふのつみ)」は<愛着の罪=執着する・させること>だろうか。大将が執着することだけでなく、姫が大将に執着させることも悪い、と言っているように聞こえる。 \* 「ひとひのしゅつけ」は<出家生活の一日=戒律を守って過ごした一日>。 \* 「はかりなし」は<計り知れない=膨大だ>。 \* 「なほ」は注に<『集成』は「(還俗して

も) なお安んじて (その功德に) おすがりなさるようと存じます」と注す。>とある。「還俗(げんぞく)」は<戒律生活から世俗生活に戻る>ということのようだが、この僧都の腰砕けは意外だった。インド哲学者の中村元博士が以前にテレビ番組で、タイ仏教は出家と還俗が自由で修行が日常生活に溶け込んでいる、みたいな話をしていて、私に仏教の何が分かるものでもないが、そういう形の出家もあれば、生涯を仏門に投じる出家もあるような気がする。少なくとも、この常陸女の場合に関して言えば、世俗では救われないと訴えて出家したのだから、其を許した僧都が還俗を勧めるのは、やはり責任放棄だ。姫の還俗は大将にとって都合が良いだけで、肝心の姫本人にとっては、全くの突き放しだ。僧都は一度身柄を引き受けた以上は、あくまでも姫の立場を守って、必要なら自分の職を辞すべきだ。傍目の私でさえ本当に驚いたし落胆したのだから、姫はさぞ悄然としたことだろう。 \*「こぎみ」の「君」は尊称だから、姫に対しては<あなたの弟君>と示しているのだろう。姫はまだこの童子を見ていないようだが、失踪から一年ちょっとだから、見れば弟と分かるはずだ。

と書いたり(と書いてありました)。

### [第三段 浮舟、小君との面会を拒む]

まがふべくもあらず(間違えようもなく、還俗を勧める文面を)、書き明らめたまへれど(僧都ははっきりとお書きになっているが)、異人は心も得ず(姫と大将との仲を知らない、姫以外の人には、その理由が分かりません)。

「この君は、誰れにかおはすらむ(この小君は誰でいらっしゃるのか)。なほ、いと心憂し(もう、まるで分からない)。今さへ(このように事態が変わっている今でさえ)、かくあながちに隔てさせたまふ(あなたは頑なに隠し立てなさって)」

と責められて(と姫は尼君に責められて)、すこし外ざまに向き見て見たまへば(御簾内から少し縁側の方を向いて御覧になると)、この子は(この遣いの子は)、今はと世を思ひなりし夕暮れに(いよいよ入水を決意した夕暮れに)、\*いと恋しと思ひし人なりけり(とても恋しく思い出した弟なのでした)。同じ所にて見しほどは(常陸守邸で一緒に住んで会っていた内は)、いと\*性なく(元気過ぎて、手を焼いて)、あやにくにおごりて憎かりしかど(弥に我が強くて閉口したが)、母のいとかなしくして(母親がとても可愛がって)、宇治にも時々率ておはせしかば(宇治にも時々連れて来ていらっしゃったので)、すこしおよすけしままに(少し大きくなってからは)、かたみに思へり(互いに仲良くしていたのです)。\*童心を(わらはごころを、その弟が懐いていたことを)思ひ出づるにも、夢のやうなり(思い出されるにつけても、その弟が今この尼庵の簀子にいることは、夢を見ているようで不思議です)。\*「いと恋しと思ひし人」については、浮舟巻七章六段に「れいは、ことに思ひ出でぬはらからのみにくやかなるも、恋し」とあった。 \*「性なし(さがなし)」は<くいじわるだ。口やかましい。>の他に<やんちゃだ。手に負えない。>とも古語辞典にある。 \*「童心を～」の文は文意が取れない。当て図法で言い換えて置く。

まづ(姫は真っ先に)、母のありさま、いと問はまほしく(母の様子をぜひ訊きたく)、「\*異人びとの上は(他の人の話は)、おのづからやうやうと聞けど(自然に少しづつ聞いていたが)、親のおはすらむやうは(母親の御様子は)、ほのかにもえ聞かずかし(全く聞いていないのだから)」と、なかなかこれを見るに(と、なまじ弟を見た所為で)、いと悲しくて(親愛の情が込み上げて)、ほろほろと泣かれぬ(ポロポロと泣けてきます)。 \*「ことひとつのうへは」は注に<薫や匂宮については。>とある。確かに、姫は僧都や紀伊守などから、間接的にせよ大将や兵部卿宮の様子は聞き知る機会が今までにあった。が、固有名の明示は敬語遣いも無いので差し控えて置く。

いとをかしげにて(その童子はとても可愛らしく)、すこしうちおぼえたまへる心地もすれば(少し姫に似ていらっしゃる気もするので)、

「\*御兄弟にこそおはすめれ(弟君でいらっしゃるのでしょう)。聞こえまほしく思すこともあらむ(お話しなさいたいこともございましょう)。内に入れたてまつらむ(中にお入れ申し上げましょう)」 \*「おおんはらから」は、此处では小君を間近に見て言っているのだから<弟君>の意味なのだろう。それなら、そのまま<おとうときみ>とか<おおんせうと>とか言っても良さそうな気がするが、そういう言い方はこういう時には慣習上しなかったのかもしれない。

と言ふを(と尼君が言うのを)、「何か(いや、どうしてそんなことが出来ようか)、今は世にあるものとも\*思はざらむに(もうこの世に生きていても思わずに出家を貫いて行く心算の私なのだから)、あやしきさまに面変わりして(親の期待に背く尼姿になって)、ふと見えむも恥づかし(ほんの少しでも会うのは気が引ける)」と思へば(と思えば)、とばかりためらひて(姫は少しためらってから)、 \*「おもはざらむ」は<「思ふ」の未然形+打消しの助動詞「ず」の未然形+状態の助動詞「あり」の未然形+意志の助動詞「む」>だから未来意志の<思わずに行く>という言い方。僧都が勧めた還俗を断る強い意志表示だ。

「\*げに(現に今、そのようにあなた様が)、隔てありと(私が隠し立てをしていると)、思しなすらむが苦しさに(お思いでいらっしゃるようなのが辛くて)、ものも言はれで\*なむ(上手くお話し申せないのですが)。 \*「げに」は<仰せの通り、なるほど、確かに、実に>などの重認識の副詞句語用が多いようだが、此处の「げに」は<現に今、実際に>という現場認識を、副詞句ではなく字句通りの意味で語用している、と読みたい。 \*「なむ」は此处で文末として、一呼吸置く言い方と見做すこと自体には同意したい。が、「ものも言はれで」と言いながら、実際には姫は発言を続けるのだから、この「なむ」には<ものなれど>という逆接意が込められている、ということは見て置きたい。

\*あさましかりけむありさまは(私が宇治院に流浪した浅ましい姿は)、珍かなることと見たまひてけむを(奇異な事と御覧になったでしょうが)、うつし心も失せ(その時に正体を失い)、魂などいふらむものも(魂などというものも)、あらぬさまになりけるにやあらむ(以前とは違ったものになったのかもしれない)。 \*「あさましかりけむありさま」は注に<宇治院で発見された当時の浮舟の姿。>とある。

いかにもいかにも(どうしても)、過ぎにし方のことを(昔のことを)、我ながらさらにえ思ひ出でぬに(我ながら全く思い出せずにいましたが)、紀伊守とかありし人の(紀伊守という御方でしょうかがお見えの時に)、世の物語すめりし中になむ(世間話をしたような中に)、見しあたりのことにやと(知っている人のことだろうか)、ほのかに思ひ出でらるることある心地せし(少し思い出されることがある気がしました)。

その後(それ以降)、とざまかうざまに思ひ続くれど(いろいろ考えて来ましたが)、さらにはかばかしくもおぼえぬに(全くはっきりしませんものの)、ただ一人ものしたまひし人の(ただ一人いらっしゃった母親が)、いかでとおろかならず\*思ひためりしを(何とか私を一人前にしたいと思っていたようでしたが)、まだや世におはすらむと(今も生きていらっしゃるだろうか)、そればかりなむ心に離れず(それだけが心に離れず)、悲しき折々はべるに(悲しく思う時がありましたが)、今日見れば、この童の顔は(今日見れば、この童子の顔は)、小さくて見し心地するにも(幼い時に見た気がするもの)、いと忍びがたけれど(とても懐かしいが)、今さらに(今さらは)、かかる人にも(この人にも)、ありとは知られでやみなむ(生きてると知られないままでいたい)、となむ思ひはべる(どのように思っております)。 \*「おもひためりし」は「思ひたんめり」の「ん」が無表記になっているものらしい。「たんめり」は「たるめり」の音便、とのこと。「たるめり」は<～していたらしい>で、主語は母親なのだろう。

かの人(母親が)、もし世にもものしたまはば(もし生きていらっしゃるなら)、それ一人になむ(その人一人にだけは)、対面せまほしく思ひはべる(対面したく思い申します)。この僧都の、のたまへる人などには(この僧都が御手紙で仰っている大将殿には)、さらに知られたてまつらじ(決して生きていることを知られ申したくない)、とこそ思ひはべりつれ(とは強く思い申します)。かまへて(くれぐれも)、ひがことなりけりと聞こえなして(私のことは人違いだと取り繕って)、もて隠したまへ(お隠し下さい)」

とのたまへば(と仰ると)、

「いと\*難いことかな(言い繕うのは、とても難しい)。僧都の御心は(僧都のお考えは)、聖といふなかにも(厳しく善行修行する聖という中に於いても)、あまり隈なくものしたまへば(あまりに正直一途でいらっしゃるので)、\*まさに残いては、聞こえたまひてむや(大将殿には、どうして言い残すようにお話しなさいましょうか)。後に隠れあらじ(その後なのだから、今さら隠しようもありません)。なのめに軽々しき御ほどにもおはしませず(また大将殿は、私如きを取り繕える、並の軽々しい身分の御方ではございません)」 \*「かたい」は「難き」のイ音便で、現代語と同じなのが妙に気持悪い。 \*「まさには」は「勝る・優る」や「増す」と同語感なのだろうか。他に秀でて目立っている、ような語意に思われ<確かに。ちょうど。>という副詞語用の紹介が古語辞典にある。が、辞典には他に(下に反語を伴って)の補説付きで<どうして～であろうか>という言い方になるとも記されている。で、まさには、此处での語用が「まさに残いては、聞こえたまひてむや」という反語文型になっている。「残いては」の「残い」は「残す」の連用形「残し」のイ音便だから、「まさに残いては」は<どうして残すようには>という言い方。ただ、「まさには」は「何に」とは違って、こ

の「どうして」は疑問の〈何故〉ではなく、そうする理由が無いので〈何でそうするのか=決してそうしない〉という強調語用だ。

など言ひ騒ぎて(と尼君は狼狽して言って)、

「世に知らず心強くおはしますこそ(稀なる強情でいらっしやる)」

と、皆言ひ合はせて(と女房たちに指図して)、母屋の際に几帳立てて\*入れたり(母屋の前に几帳を立てて、小君を御簾内の廂の間に通しました)。\*「入れたり」は注に〈小君を廂間に。〉とある。本当に分かり難い主語・目的語の省略だ。

[第四段 小君、薫からの手紙を渡す]

この子も(小君も)、\*さは聞きつれど(大将から姉君が此処で生きているとは聞かされていたが)、幼ければ(子供なので)、ふと言ひ寄らむもつつましかれど(直ぐに言葉を発するのも気が引けたが)、\*「さは」は注に〈姉の浮舟がここにいると、薫から聞かされていたが。〉とある。「さは」はその言い方のまま言い換えれば〈そのようには〉だが、当時の読者はよほど作者と共通認識が深かったらしく、この言い方で、この場面の臨場感を味わえたらしい。私は、この場面を掴むには、どうしても具体意を補語せずにはいられない。

「またはべる御文(もう一通ございます御手紙は)、いかでたてまつらむ(どちらへ差し上げたら良いのでしょうか)。僧都の御するべは(僧都の御紹介で)、確かなるを(私の素性ははっきりしていますのに)、かくおぼつかなくはべるこそ(このようにお顔も拝せず隔てあるのでは)」

と、伏目にて言へば(と伏目にて言えば)、

「そそや(ほら、あなた)。あな、うつくし(こんなに可愛い人なのに)」

など言ひて(と尼君は姫に言って)、

「御文御覧ずべき人は(御手紙をお読みになる方は)、ここにもものせさせたまふ\*めり(此処にいらっしやいますよ)。\*見証の人なむ(付き添いの私は)、いかなることにかと(どういうことかと)、心得がたくはべるを(事情がよく分かりませんので)、なほのたまはせよ(もっとお話し下さい)。幼き御ほどなれど(あなたは幼い御歳のようなのだが)、かかる御するべに頼みきこえたまふやうもあらむ(こういうお使いを大将殿がお任せ申しなさるだけの訳が有るのでしょうか)」\*「めり」は〈「見えあり」の約〉のような説明もあり、この几帳の内と外での関係性で言えば、あなたには見えなくても、此処に見えているんですよ、みたいな言い方だろうか。\*「見証」は「けそう」と読みがある。が、「けそう」は跳ね音の「ん」を無表記にしているので、実際の読みは「けんそう」らしい。無駄に面倒臭い。規格統一の重要性を再認識する。で、「検証」の元々の意味は〈勝負事の審判〉で、「見証の人」は〈審判員〉だが、此処では転じて〈審判員=非当事者=傍観者=尼君自身〉



ということらしい。こういう漢語語用は、尼君が子供に対して、立派な信頼できる大人、を演じようとした、のだろうか。

など言へど(と小君に言うが)、

「思し隔てて(このように隔てなさって)、おぼおぼしくもてなさせたまふには(余所余所しく持て成しなさるのでは)、何事をか聞こえはべらむ(何もお話し申せません)。疎く思しなりにければ(私を嫌っていらっしゃるなら)、聞こゆべきこともはべらず(お話し申したいこともございませぬ)。ただ(ただ殿が)、この御文を(この御手紙を)、人伝てならで奉れ(姉君に直接お渡し申せ)、とてはべりつる(とのことでございませぬ)、いかでたてまつらむ(何方へ差し上げましょうか)」

と言へば(と小君が言えば)、

「いとことわりなり(尤もな話です)。なほ(もう)、いとかくうたてなおはせそ(そのように片意地を張りなさいませぬ)。さすがにむくつけき御心にこそ(いくらなんでも邪険に過ぎませぬ)」

と聞こえ動かして(と尼君は姫に申し動かして)、几帳のもとに押し寄せたてまつりたれば(几帳の側に押し寄せさせ申したので)、あれにもあらでゐたまへるけはひ(姫が落ち着きもなく近くにいらっしゃる気配が)、異人には似ぬ心地すれば(他人とは思えない気がして)、そこもとに寄りて奉りつ(小君はその几帳の許に近寄って大将のお手紙を差し上げます)。

「御返り疾く賜はりて(お返事を早く頂いて)、参りなむ(行きたく存じます)」

と、かく疎々しきを、心憂しと思ひて急ぐ(と小君は姉君がこのように余所余所しいのを嫌気して、帰りを急ぎます)。

尼君、御文ひき解きて(尼君がお手紙を開いて)、見せたてまつる(姫にお見せ申し上げます)。ありしながらの御手にて(以前と同じ御筆跡で)、紙の香など、例の、世づかぬまでしみたり(紙の香など例によってまとないほど香り高い)。ほのかに見て(その手紙をチラッと見て)、例の、ものめでのさし過ぎ人(例の風流好きのお節介な尼君は)、いとありがたくをかしと思ふべし(とても貴重で立派なものと思うようです)。

「さらに聞こえむ方なく(今さら申す言葉も無い)、\*さまさまに罪重き御心をば(さまさまに罪重きあなたのお考えは)、\*僧都に思ひ許しきこえて(僧都に免じて許し申して)、今はいかで(今はどうか)、あさましかりし世の夢語りをだに(急に姿を消した時の夢遊状態の話だけでも)、と急がるる心の(早く聞きたいと急かされる気持ち)、我ながらもどかしきになむ(我ながら焦らさせる限りです)。まして、人目はいかに(まして傍目には、私の姿がどんなに変に見えていることか)」 \*「さまさまに罪重き御心」は注に<浮舟の、匂宮との密通、失踪入水未遂、無断出家等。>とある。大将は常陸女をきっちり叱っている、ということになりそうだ。大将

にしてみれば至極当然の非難とは思いますが、また、是を言うことで、それでも許すという姿勢を示すことにもなりそうだが、こういう上から目線は、何とというか、未練とか優しさはありそうでも情熱を感じない。 \* 「僧都に思ひ」とは、どういう意味か。渋谷訳文には<僧都に免じて>とあるので、僧都の徳の高さを敬うということなら、仏道に沿うようなくお救い下された僧都の神通力に仏の慈悲を思い>とか<僧都に出家を願い出たことで罪障が軽減されたので>とかいう言い方だろうか。であるなら、私には意味不明の論理なので非常に不満だが、どうせ分からないなら、訳文を踏襲して流して置く。

と、書きもやりたまはず(と薫大将は、書き差したまま、こう贈歌なさいます)。

「法の師と尋ぬる道をしるべにて、思はぬ山に踏み惑ふかな (和歌 54-01)

「影法師 一寸法師 大法師 (意識 54-01)

\*注に<薫から浮舟への贈歌。「法の師」は横川の僧都、「思はぬ山」は恋の山、をさす。>とある。「法の師と(のりのしと)」とわざわざ<法師>を訓読みにしているのだから、「のり」「のし」あるいは「のる」「のす」が、「思はぬ」なり「山」なり「踏み惑ふ」などに洒落語用で掛かる詠み方をしている、のではないのだろうか。それが何かは分からないが、そうでないなら、この歌は何が面白いのか分からない。

この人は(この小君は)、見や忘れたまひぬらむ(お見忘れですか)。ここには(私はこの人を)、行方なき御形見に見る物にてなむ(行方知れずの人の御形見として世話しています)』

など(などと文面は)、こまやかなり(小君をお世話申している事まで細かく書いてありました)。

[第五段 浮舟、薫への返事を拒む]

かくつぶつぶと書きたまへるさまの(このように大将殿はつぶさに書いていらっしゃる様子では、もう詳しい事情をご存知らしく)、紛らはさむ方なきに(人違いだと誤魔化しようもないが)、さりとて、その人にもあらぬさまを(さりとて、その時とは違う今の尼姿を)、\*思ひの外に見つけられきこえたらむほどの(期待に背いて還俗の意志は無いと知られ申す私の強さの)、はしたなさなどを思ひ乱れて(極まり悪さを思い乱れて)、いとど晴れ晴れしからぬ心は(一向に晴れない気分は)、言ひやるべき方もなし(言いようもありません)。 \* 「おもひのほか」は<期待外れで=還俗要求には応じられない>と読んで置く。

さすがにうち泣きて(そのように姫は進退窮まって泣き出して)、ひれ臥したまへれば(ひれ伏してしまわれたので)、「いと世づかぬ御ありさまかな(何と頑固でいらっしゃるのか)」と、見わづらひぬ(と尼君は手を焼きます)。

「いかが聞こえむ(どうお申しませんか)」

など責められて(と姫は尼君に急かされて)、

「心地のかき乱るやうにしはべるほど(胸が苦しくてなりませんので)、ためらひて(おさまってから)、今聞こえむ(改めてお返事申します)。\*昔のこと思ひ出づれど(流浪していた時のことを思い出してみても)、さらにおぼゆることなく(一向に覚えが無く)、あやしう(不思議で)、いかなりける夢にかとのみ(どういう夢だったのかと、全く)、心も得ずなむ(分からないのです)。すこし静まりてや(少し気分が静まったら)、この御文なども、見知らるることもあらむ(この御手紙の内容も分かるかもしれませぬ)。今日は、なほ持て参りたまひね(今日は、やはり持ち帰って下さい)。所違へにもあらむに(人違いだったら)、いとかたはらいたかるべし(困ります)」 \*「むかしのこと」は<以前の暮らし>ではなく、薫大将が手紙で「あさましかりし世の夢語りをだに」(四段)と言って来たことについての、その<夢遊状態当時のこと>と読んで置く。

とて、広げながら(と姫は手紙を広げたまま)、尼君にさしやりたまへれば(尼君に突き返しなされるので)、

「いと見苦しき御ことかな(全く見苦しい悪あがきです)。あまりけしからぬは(あまりの非礼は)、見たてまつる人も(御世話申す私たちまで)、罪さりどころなかるべし(罪を免れません)」

など言ひ騒ぐも(と尼君が言い立てるのも)、うたて聞きにくくおぼゆれば(煩く聞きたくない)、顔も引き入れて臥したまへり(姫は顔も袖で被って打つ府してしまいなさいました)。

主人ぞ(あるじぞ、尼庵亭主の尼君が)、この君に物語すこし聞こえて(小君に事情を少し言い訳申して)、

「もののけにやおはすらむ(物の怪の取り憑きがお有りかもしれませぬ)。例のさまに見えたまふ折なく(普段の様子に戻ることも無く)、悩みわたりたまひて(ずっと苦しんでいらっしやう)、御容貌も異になりたまへるを(尼姿にお成りなのを)、尋ねきこえたまふ人あらば(探しなされる人が居たら)、いとわづらはしかるべきこと(とても困ることになるだろう)、と見たてまつり嘆きはべりしも(と私も拝し申して嘆いておりましたが)、しるく(その懸念が現れて)、かくいとあはれに(このようにとても悲しい)、心苦しき御ことどもはべりけるを(お気の毒な御事情がございましたのを)、今なむ(今では)、いとかたじけなく思ひはべる(まことに恐れ多く存じております)。

日ごろも(常日頃も)、うちはへ悩ませたまふめるを(ずっと御不調でいらっしやいます)、いとどかかるとどもに思し乱るるにや(御手紙にあるこうした事柄にますます混乱なされたのか)、常よりもものおぼえさせたまはぬさまにてなむ(いつも以上に話がお分かりでないようなのです)」

と聞こゆ(と話します)。

[第六段 小君、空しく帰り来る]

所につけてをかしき饗応などしたれど(尼君は主人接待で夏の山里らしい青菜に鮎の塩焼きなどの供応をしたが)、幼き心地は(小君は子供心に)、そこはかとなくあわてたる心地して(返事も無い頼りなさに落ち着かず)、

「わざと奉れさせたまへるしるしに(御手紙をお遣わしなさった殿へのお返事を)、何事をかは聞こえさせむとすらむ(私はどうお答え申せば良いのでしょうか)。ただ一言をのたまはせよかし(一言だけでも仰ってください)」

など言へば(と言えは)、

「げに(尤もな)」

など言ひて(と言って尼君は)、かくなむ、と移し語れど(お使者はこう言っています、と姫に伝え語れど)、ものものたまはねば、かひなくて(姫は返事もなさらず、しかたないので)、

「ただ、かく(ただ、このようだと)、おぼつかなき御ありさまを聞こえさせたまふべきなめり(正体も覚束ない姫の御様子を申し上げなさるしかないでしょう)。\*雲の遥かに隔たらぬほどにもはべるめるを(此处と三条宮邸は、雲の向こう遥かに隔たった所でもないようですので)、\*山風吹くとも(此处は山風が吹きますが)、またもかならず立ち寄せたまひなむかし(また必ずお立ち寄り下さい)」 \*「くものはるかにへだたらぬほど」は注に<『源氏釈』は「逢ふことは雲居遥かになる神の音に聞きつつ恋ひわたるかな」(古今集恋一、四八二、紀貫之)を指摘。『紹巴抄』は「引歌不及」と否定。>とある。 \*「山風吹くとも」も引歌がありそうだが、特に指摘は無い。

と言へば(と尼君が言えは)、すずろにみ暮らさむもあやしかるべければ(用も無いのに日暮れまで居るのも変なので)、帰りなむとす(小君は帰ることにします)。人知れずゆかしき御ありさまをも(小君自身内心では会いたかった姉君の御姿も)、え見ずなりぬるを(見ず終いだったのを)、おぼつかなく口惜しくて(心残りで寂しく)、心ゆかずながら参りぬ(不満ながら大将邸に帰参しました)。

いつしかと待ちおはするに(薫大将は何時戻るかと待っていらっしやったが)、かくたどたどしくて帰り来たれば(小君がこのように返事も無く会えないままで帰って来たので)、すさまじく(弟にも会わないという女の異常さに呆れ返り)、「\*なかなかかなり(なかなか手強い)」と、思すことさまざまにて(と薫殿は次の手をあれこれお考えになり)、「人の隠し据ゑたるにやあらむ(他に男がいるんじゃないだろうな)」と、わが御心の思ひ寄せらぬ隈なく(と、あらゆる可能性を周到に調べて)、落とし置きたまへりしならひに(迂闊に放って置いた過去の失敗を教訓に)、\*とぞ本にはべめる(すっかり俗世の権化となっていた、どのように本に書かれています)。 \*「なかなかかなりとおぼすことさまざまにて」とはまた、何とも掴み所の無

い言い回しだ。ただ、薫大将は是で常陸女との接触を諦めた、とは到底思えないし、しかし、小君で釣れなかったからといって、母君を担ぎ出したのでは、女の出家がいよいよ固まってしまいそうなので、次の作戦を「思ふことさまざま」なのだろう、と私は読みたいので、この「なかなか」は<敵も思った以上に手強い>という言い方と読んで置く。 \*「とぞ」が作者が真に意図した結びかどうかは、今となっては確かめようもないらしい。が、現行の結びがこうなっている以上は、それらしいオチを着けたくなるのが人情だ。

(2014年3月2日、読了)